

地方の國語教育

藤原與一

日常の國語教育をどう實踐して行つたらよいか。これは足下
に迫つた問題である。我々は國語教育の現實と言ふことを、もう
一度反省してみなければならぬ。

極めて平凡なこと語ながら、國語教育は、常に具體的たるを要す
る。國語の實際に即して、そこに實着な「國語教育の場面(場所・
條件・基礎)」を獲得することが必要である。言はば國と教育の
具體性である。具體的であつて始めて、實踐の問題は眞に解決せ
られよう。教師の確乎と握つた國語の教育こそは、よく地道な、
成果を齎すことの確實な國語教育を完遂せしめるものと思ふ。

今、「國語の醇化育成方法に就て」と言ふ主題の下に、「地域
別に立つ國語教育」と言ふ題目が課せられたことは、筆者には、
意味深いことに思へる。但し、地域別に立つと言ふことは、地方
地方に於けるとの意に解すべきであらう。「地域には方言がある、

その限定された地域の別に立つては云々」と一概に考へては、折
角意圖する實着な國語教育の實踐を、自ら、靜的な流通不能のも
のに押詰める傾きがあるからである。假りに地方の「國語教育」
と稱すれば、廣く何處にもそこ／＼で「地方」を考へる限り、常
に彈力のある具體的な國語教育の營みが考へられるだらう。我々
が何時も立たされてゐる國語教育を、絶えず推進して行くのには、
結局その地その地の生活語の状態に即應して行く外はない。
國語教育が切實な問題であればあるほど、この點の諦視が肝要な
のである。正しい意味の「地域別に立つ國語教育」とは、國語教
育上の一特殊觀點でも何でもない。國語教育を行ずる上の一一般
基礎である。これが、國語の醇化育成方法に關聯するものとして
取立てられてゐるのは愉快なことであつて、醇化育成を下から盛
上らせるものと考へる時、その遂行のためには、やはり現實的生
活語、生々しい日常の語言葉をしつかりと踏まへて行くことが基
本となるのである。

國語の諸問題の歸一する所は、究極に於て、國語の醇化發展にあると言つて差支へないであらう。國語の教育はその運用にあづかるものである。そのためには地に足を着けなければならない。國語の醇化育成には、地方の國語教育を、そのあるべき姿に立上らせることが第一の要件である。

二

今日まで、地方の國語教育者は、ヤゝともすれば、その教育の基礎を見忘れがちではなかつたか。その地の生活語を外にし、よくもわるくも現によつて立つてゐる日常の言葉を正面の對象に取上げることなくして、何の國語教育が出來よう。いま、醇化と言つても、それは決して高遠過ぎる理想ではない。全く、生活語それ／＼の育成を措いて醇化は無いのである。言ひかへれば、國語の醇化育成は、極めて卑近な日常事たるべきものである。それであつてこそ、日々の國語教育實踐に力が入り、勵みが出る。教師の一言一行、一舉手一投足が、大きく國語の醇化に關聯するものと確信されてゐること以上に、國語教育の實效を擧げるため緊要なものはない。

要は教師その人にあると言へる。指導の立場にある人の、國語に關する教養が一切を決定する。言葉の社會教育も考へ、それも意識的たると無意識的たるとを問はないとすれば、こゝに國民全

般の國語に關する教養が問題になる。

教師或は一般人の國語に關する修養は、自己の生活語を反省する所から始めればよい。一つの單語、一つの言ひ廻しにも眞劍な態度で討究の眼を向けてみるのが手掛りである。さうして、教師は指導すべき相手の生活語を仔細に觀てゆくのである。國語に關する教養を積むのには、又、地道に國語の現實態をはつきりと掴むことがもとなる。

たゞに國語とのみ稱して、その實を嚴密に握つてゐないことはさびしい。各地方の人々は、その地方々々の日常語に即して、國語の教養を磨き高めるべきである。

他方、教師の目標となるのは、所謂標準語である。

三

地方の國語教育にとつて、常に相牽く關係にあるのは、標準語の問題であらう。これが地方語に全然對立するものとして兩端に見分けられると、國語教育は大きな困難に逢着する。標準語の目標も、亦、生活語との關聯に於て、よろしく一線上に見詰められなければならないのである。

標準語と言ふものは、國語としての理想的な言語體系だと思へばよい。もし標準語の設定が實現するならば、設定とその指示とはあくまで具體的である。然し、そのものは、正に言語體系であ

つて抽象的であり、根ひは一國語としての理想的な境地にある。標準語とは常時、規範とすべき型であり、手本である。その教へる所が、現實の國語の諸相に對して一般的抽象的であるのは當然である。これを鏡として個人が國語を語る時、實際の言語生活が起り、且つ標準語の生活化が始まる。

今日、まだ標準語の具體的設定公示にまでは至つてゐない。けれども世人は、大體東京語を本位にしてその上に標準的なものを考へてゐる。放送局のアナウンサーは、何等かの準備に隨ひ、かなり意識して標準語の生活を示さうとしてゐる。從來の小學校教科書に見られた言葉は、標準語設定への一つの基礎的な試みと見てよからう。今回、國民學校國語教科書の教師用には、標準語確立を目ざしての具體的指示が、かなり多くなされた。

地方の國語教育者は、これらを據り所にして、自己の標準語意識を涵養して行くやうに力めなければならない。出来上つた標準語を徒に待望するのは無理である。この際、標準語は教師その人の頭の中に在ると言ひたい。さうあるべきであつて、そのやうな信念を持つことが即ち國語の教養である。標準語はどこにも與へられてゐないと言ふが、求めればいくらでもあるとも言へる。その求め方は、自己の生活語、教育對象の生活語を確實に捉へる所から始まる。かうして、標準語生活を自ら醸成して行くのである。所謂國語の醇化育成である。

地方の國語教育

標準語即ち國語の理想的言語體系は、それ／＼の地方語を母胎とするものであることを見通してはならない。國語教育者は標準語の育成者であるが、その人は、教育對象の生活語に徹することによつて、その醇化・標準語化の道を講じ得る。少しでもよりよい方へと仕向けて行くことが既に醇化の道である。或は正しいとか美しいとか雅醇とかを庶幾する。その規準は人によつて動くかの如くであるが、それは今問ふ所でない。教師その人が、自己の教育的信念に照らして、これが善導であると考へ定めるならば、それでよい。その信念の背後には、生活語體驗を通じて、國語に對する歴史的な見方が、當然培はれて來てゐることを豫想せざるを得ないからである。故に又、正邪の判定も、個人の恣意であるかの如くであつて實は恣意でない。多數がかうだ、世上の大勢はかうであると言ふことなども、歴史的な根據のあるものとして諒解される。であるから、教師が、自ら考へ、世上に顧みて、何等かの處置をとることは、先づ是認しなければならぬのである。これによつて、教師には勿論、相手にも、次第に標準語意識が涵養される。要するに出發點は生活語にあることが明かであらう。さうして、標準語教育には、次善へ／＼の段階があると考へればよい。

生活語を離れ、地方であることを忘れて、一気に標準語として高いものを漠然と頭に描くことは、標準語の修養を無味乾燥なも

のたらしめる所以である。標準語生活の單に靜的な考へ方は、國語に生きる人を、偶像化せしめるものであらう。標準語觀に市と厚みと彈力とを持たせて行つてこそ、標準語教育が個々人の言語生活をよく暢達せしめるものになるのである。かうでなくては標準語の教養とは言へない。今日我が國の地位は世界的に目覺ましい向上を遂げようとしてゐる。もはや國民は狹隘な偏固人であつてはならない。寛濶悠々の大國民たるを要する。この秋、言語上の教養としても、眞に洗練せられた、ゆとりのある大きいもの即ち正に教養の名にふさはしいものが欲しいことは言ふまでもないのである。

四

國語の教育は具體的的基本的には生活語の指導であり、それは國語本位に言へば國語の醇化育成であつて、指導教育されるものに就いて言へば標準語教育である。方言と言ふ語を地方の言語と解すれば、方言を教育することがやがて標準語教育になる。方言教育と標準語教育とは同義語と見てよい。こゝに於て、地方の國語教育のなすべきことは明瞭であらう。

方言の事象に氣附かぬ人はあるまい。そのどの點が卑俗だとかどうとか、色々の氣附きを生ずることも、ごく自然に有りがちであらう。自覺・意識の次に批評吟味、その次には、更に他との

對照比較を試みて、よりよいものを求め立てて來る筈である。これだけの手順は誰しもわけなく實行して殆ど迷ひが無い。それでよいのであり、教師たるものは、方言の事態を熟視して、どれほどづつでも、我に叶ふ所から、着々と方言教育をして行くべきである。

扱て、標準語教育の進化階梯の究極に視はれてゐる標準語體系なるものは、今日、東京語を本位として、概ね國語の東部方言の上に漸次形成されようとしてゐる。さうだとすれば、國語の諸方言分布が大體東西の二大方言にままとめて見てもよいやうな點をも一國語の教育は、西方の方言地域に於て、特に實踐上の困難を覺えよう。先に述べた「よりよいものを求め立てて來る」ことが、西部方言地域では、結局東部方言的なものにならなければならぬからである。勿論、標準語體系の樹立に、西部方言を顧みないと云ふことはあるべきでなく、むしろ特にそれを注意して、從來の大體の傾向に批判を加へ、眞に國語の總體に君臨する底の標準語體系を歸結すべきであるが、それにしても、今日までの大勢に隨ふことも道理あることであるから、いづれ將來確立されるべき標準語が、東京語を母胎とし、東部方言的なものを主調とするものになるであらうことは想像される。すると、やはり西部方言地域に於ける先の困難は免れ得ないだらう。ともかく現状は、よくそれを物語つてゐるのである。

東北奥と南九州とに旅行してみると、一つの大きな對照を捉へ得る。東北人は、なるべく東京語本位の物言ひをしようとするのちらの言葉をよく聞き分けてくれて當方に氣安さを覚えしめるのは勿論、その返事が我々に比較的分り易い。然るに南九州人の場合は、かなり聞き分けてくれたとしても、答へてくれる言葉が甚だしく分りかねる。東北人は幸ひにも地言葉が標準語的なのである。少くとも西部方言人にとつてはその感が深い。東北に限らず、すべて東京語と親近な關係にある方言系統の地方は、現下の標準語教育を實施して行く上に、多大の便益があると言つてよか

らう。近畿以西の地の人には、長野縣や栃木縣の人々が少しだけ氣を使つて語る言葉も、もう立派な標準語の話しぶりとして響く。しかもそれは、板についた標準語生活であつて、西の方の人の努力して得た所の普通語と稱する標準語の多少とも形式化した生活などは、これに及びもつかないのである。それらの地方の國語教育は、指導の端的明確な點で、實に幸せであると言つてよい。反對に西部側では、生きた標準語生活を築き上げるのに、何重かの苦心を要する。

然し、實績がこれに正比例するとはばかりは行つてゐない様であ

る。僅かな言語差は氣付き難く、氣附いてもそれで容易に間に合へば急いで改め進めようとしなない。つまり無爲にして過ぎるのである。反對に言語差が大きいと、常に儉安をゆるさぬものがあり、何かに追はれてでもゐるやうに感ずる。この切實さが推進力になり、教育の事は少しづつでも進む。人がその言語生活を反省するやうになれば、よし今の状態が所謂標準語に遠いものであらうとも、それで明るい將來が望まれるのではないか。人の自覺がその後の進歩を齎す。教育は、このやうな自覺を持たせるに至れば、既に實を擧げたのに等しい。

尙、東北地方、更に廣く東京語と同系の地方にしても、又それ／＼に、教育の困難な内部事情もあらう。東北辯が南九州辯より東京語などに近いからと言つて、東北辯必ずしも九州辯より單純なわけではない。それ／＼の地で、かなり大きい東京語との隔りも見られる。それだけに、我が標準語體系の確立には、東京語と同系の諸地方も、新たに近畿四國その他と共に、同列の地盤として再吟味しなければならぬと言ふこともあるのである。

何れにしても、國語の教育を國家的に考へるに當つては、單純な東京語本位の考へ方ばかりでは足りず、地方に即するとして、先づ國の東西を二大別してみる必要があるである。

これは甚だ大づかみのことであつて、一面これに執らはれない用意もあつてよい。けれども地方々々の言葉を取上げてみれば、

それが大なり小なり一方に屬することは、常に動かない。この故に、地方の國語教育は、くだいて言ふと、全國を二大別する大きな見方以上に、更にそこ／＼の小分けがなされ、その一つ一つに、具體的な方言教育が考へられるわけである。筆者の實務は、その全國諸方言分布の委細に應じて、或は語法上より又音韻上、語彙上より、地方の國語教育の動的發展的な實踐方法を語ることにあらうが、今はそれを述べる餘裕を持たず、考へ方、心構へを説くのに過ぎない。

五

生活語、地言葉に立つ國語教育を行ずるものは、つとめて謙虚に國語を視なければならぬ。國語とは、確信を以て把握することの出来る日本語の實體、即ち現實の生活語である。これに打入つて一々を味ひしめ、且つその力・生命におどろく。こゝに至れば、自ら、國語への學究的な隨順と信奉とが起るであらう。これが、教育されるものの國語生活を體化し陶冶する。この自他一體の世界が、國語の精神的教育の場である。期する所はこゝにあり、この主眼が柄乎としてゐる限り、方言教育は、正に國語の醇化育成の易行道として、標準語教育の名と共に、發展せしめられるであらう。かくて地方の國語教育が完うせられる。